

スペシャル対談

本村幸雄 × 大淵隆

選手教育ディレクター

スカウトディレクター

北海道日本ハム
ファイターズ

撮影：武山智史

高校野球の監督を経て プロ野球界に飛び込んだ2人 “教育メソッド”を明かす

もとむら ゆきお (左)

1971年生まれ、大阪府出身。習志野高(千葉)一日本体育大。習志野高では城友博(元ヤクルトなど)らと夏の甲子園出場。一学年下には野口寿浩(元ヤクルトなど)がいた。光明相模原高(神奈川)の監督を経て、2011年に日本ハムファイターズの選手教育ディレクターに就任。

おおふち たかし (右)

1970年生まれ、新潟県出身。十日町高(新潟)一早稲田大。早稲田大では仁志敏久(元巨人など)と三遊間を組み、4年秋に三塁手としてベストナインを獲得。日本IBM、西川竹園高(新潟)の監督を経て2006年に日本ハムファイターズのスカウトに転身。

おわりに

スペシャル
対談

特別
インタビュー

渡辺 元智 前監督 横浜
上田 誠 前監督 慶應義塾

(神奈川)

激戦区・神奈川を戦い抜き
惜しまれつつ勇退した両氏による
いまだき世代への熱きメッセージ

285

261

齊藤 博久 監督 桐蔭横浜大(神奈川)

「何のために大学野球をやるのか？」
活動理念を明確に示し
勝利と人間形成の両立を実現する

235

平田 隆康 監督 向上(神奈川)

「人で勝つ——」
130名ひとりひとりに目を配り
選手全員の手を引っ掛ける

211

能力の高い選手が集まり、野球だけやっている集団がプロ野球だと思っていないだろうか？ これから紹介する対談を読めば、その考えはガラリと変わるはずだ。登場するのは、北海道日本ハムファイターズのスカウトディレクター・大淵隆氏と選手教育ディレクター・本村幸雄氏。ともに高校の元教員、元監督という共通項がある。

球団のモットーは「スカウティングと育成で勝つ」。この土台となっているのが、若手選手への教育である。プロ野球の現場での教育とはどのようなものか。2人にたっぷり語ってもらった。

北海道日本ハムファイターズ

北海道札幌市に拠点を置くプロ野球チーム。「スカウティングと育成で勝つ」方針のもと、若手選手を積極的に起用して一流選手に育てている。2006年、07年、09年、12年に、レギュラーシーズン、CSを制し日本シリーズに進出。選手寮（勇翔寮）および二軍の本拠地は千葉県鎌ヶ谷市。

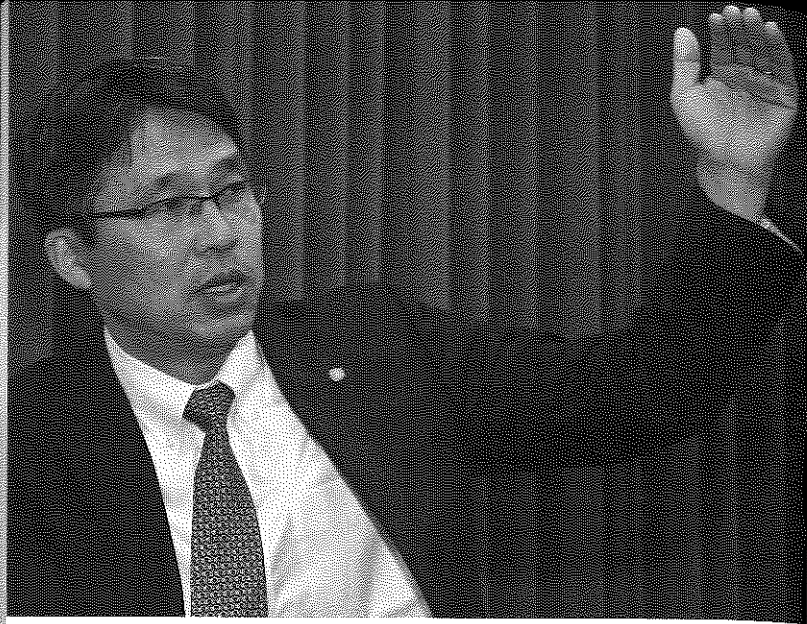
高校野球の監督を「選手教育ディレクター」に招く

大淵「社会のモデルになるトップアスリートを育てる」
本村「態度教育や日誌を通して、自立型人間を育てていく」

8年ほど前だったと思いますが、大淵さんから「光明相模原の本村監督の指導が素晴らしい」と教えていただいた記憶があります。数年後、「本村監督が日本ハムの選手教育ディレクターに就任」（2011年1月）という報道が出て、びっくりしました。なぜ、本村さんに声をかけたのでしょうか。

大淵 いい選手がいると聞いて、光明相模原の練習を見に行つたのがきっかけです。正直、驚かされました。選手自らが動いていて、監督が押さえ付けている感がない。いい意味で、型にはめずにバラバラ。それでいて、ひとつの方向に進んでいる感じがあったのです。「不思議だなあ」と思いましたね。こんなこと言うと思し訳ないですけど、学校は決して進学校ではありません。それでも、こういう指導ができるのかと感心しました。

本村 大淵さんの第一印象は、スカウトっぽくないと思いましたね。だいたい、スカウ



「プロ野球の魅力はメッセージカ」と大淵スカウトディレクター。

トの方は近寄りやすい雰囲気があるんですけど、大淵さんは違いました。

——そこから、「球団に採用する」という発想はどのようにして生まれたのでしょうか。

大淵 私も、本村さん同様にプロ野球選手としての経験を持つていません。縁あって、ファイターズに声をかけていただいたわけですが、決して「憧れ」だけでプロ野球の世界に入ったわけではありません。以前から、スポーツそのものの価値を高めたいと考えていました。そのなかでプロ野球の世界に魅かれたのは、「メッセージカ」があるからです。メディアに取り上げられる機会が多く、言葉が広まる力がある。プロ野球から社会のモデルになるようなトップアスリートが生まれれば、スポーツの価値が高まるのではないか。そのためには勝つことや技術を上げるのと並行して、人間的な成長が不可欠だと考えていました。

——スカウトという立場ですが、選手を獲得して終わりではないと。

大淵 もちろんです。入ってからの教育が絶対に必要。根本にある考えは、多くの選手がどこかのタイミングで球団を卒業していくということです。ユニフォームを脱いで社会に出たときに、「野球しかやってきませんでした」「野球以外は何もできません」ではいけないわけです。高卒であれば18歳の若者です。社会的財産でも

ある若者を預かった球団として、社会人としての常識や考え方を身につける場を設けないのは、あまりにも無責任と言えます。

——選手には、具体的にどのような教育をしていたのでしょうか。

大淵 新人選手や若手に対して、球団の歴史やプロ野球に関わるお金の話、プロ野球選手として求められることなどを話してきました。また、日誌を付け、本と新聞を読むことも義務付けていました。ただ、春先はいいですけど、1年間継続してとなるとなかなか難しい。シーズンが始まると、どうしても野球の結果を追うよ

うになつてしまう。継続して伝えていくにはどうしたらいいかなと悩んでいたときに、本村さんと出会ったわけです。

本村 最初にお話をいただいたときは、冗談だと思いました。あるときに「今年は、本村さんの獲得が一番のテーマです」と言われて、面白い冗談言うなって(笑)。じつは2年間、ずっと断り続けていたんです。高校野球の監督が、プロで通用するなんてまったく思っていませんでしたから。3年目に、「三顧の礼」ではないですが、現・GMの吉村浩さんも学校に來られて、球団の熱い思いを感じました。覚悟を決めて、人生を賭けてみようかと決断しました。

——プロ野球選手の教育に、興味は持っていたのですか？

本村 プロ野球の世界でも教育に力を入れている球団があるのかと。正直、びっくりしましたね。

大淵 何より、本村さんに魅力を感じたのは、普遍的な手法を持っていたからです。カリスマ的なオーラや経験値によるものではなく、日誌や目標設定用紙を書くことに力を入れて、主体性を引き出している。しっかりとした手法があるので、どこでも通

用すると感じました。高校生でもプロ野球選手でも同じこと。言葉を変えれば「再現性」があるということですね。あとは、関西弁をしゃべれることも大きかったですね(笑)。

——関西弁ですか……？

大淵 何となく、関西出身の野手を獲っていくイメージがあつたんです。漠然とした感覚ですが、野手は関西の野球を取り入れたほうが強くなる。そのなかで、多少はヤンチャな選手もいるかもしれない。そう考えると、関西弁でやりとりできるのは大きな要素になるのです。

本村 一応、生まれが関西なので(笑)。

——それもまた興味深い考えですね。実際に、光明相模原ではどのような指導をしていたのでしょうか。

本村 ベースになつているのは、原田隆史先生(*自立型人間の育成を掲げ、大阪市立松虫中学校陸上部を13度の日本一に導いた指導者。現・原田教育研究所代表)の教育法です。高校野球の監督として、行き詰まりを感じていた時期がありました。私が選手として経験してきた野球は上からのトップダウンで、監督の言うことは



本村選手教育ディレクターの原点は原田隆史氏に学んだ教育法。

「絶対」という世界。当初はその方法を取っていて、ある程度は結果が出ていたんですが、子どもたちが大学で野球を続けられないんです。高校でお腹がいっぱいになってしまふ。これでは、いけないなと。ただ野球をやっているだけで、教育にはなっていない。そのときに原田先生と出会い、先生が主宰している「教師塾」に通うようになった。高校野球はあくまでも人生のなかの1ページ。将来の成功者になつてもらうには、内面を磨いていかなければいけない」と教わりました。

私も原田先生の取材をしたことがありますが、「主体変容」「5つの心づくり」（心を使う、心をきれいにする、心を強くする、心を整理する、心を広くする）、「日誌は文字を書くのではなく、自分の思考をアウトプットするもの」など、印象的な話がい

くつもありました。

本村 そこからキーワードになったのが、「自立型人間を育てる」。その土台となったのが挨拶、靴を揃えるなどの態度教育や、日誌と目標設定用紙を書くことでした。

ファイターズの教育実践法

大淵 「野球は野球、教育は教育として役割を区分けしている」
本村 「掃除や物を揃えることは、心のすさみ除去につながる」

——本村さんの肩書きは「選手教育ディレクター」。あまり聞き慣れない言葉ですね。

大淵 選手たちへの教育が仕事です。よく勘違いされるのですが、「寮長」ではありません。自宅から通われています。

本村 衣食住をともにすると、家族のようになって、情が生まれてしまいます。そうなると、ちよつと違うかなと。

大淵 寮長は、プロ野球のOBの方がされていて、すでに6歳を超えています。選手にとっては、お父さんのようでそれこそ家族に近い存在です。

—— それぞれに役割があるわけですね。大淵さんも本村さんも、プロ野球を経験していないわけですが、そのやりづらさはなかったですか。

本村 なかったですね。

大淵 ないですね。ただ、それはファイターズのシステムによるところが大きいと思います。野球は野球、教育は教育としっかり区分けしている。球団全体が教育の大切さを理解しています。技術を上げるのは監督やコーチで、教育面は本村さんやスカウトがサポートする。このやり方がうまくいっています。

本村 だから、選手に対して野球の技術的な話は一切しません。そこは明確にしています。ごっちゃになると、うまくいかないでしょうね。鎌ヶ谷でファームの試合を見ていますが、ゲームの内容よりもベンチでの様子を見ています。凡退したあとやミスのあとに、どんな態度を取っているのか。ですから、ファイターズのベンチがよく見えるように、逆のスタンドに座っていますね。

—— ファイターズでは、具体的にはどんなことから始めたのでしょうか。

本村 礼儀、挨拶、掃除、片付け。野球日誌や目標設定用紙、マンダラート（*発想法の一種。9マスを埋めていくことで思考を整理できる。31ページ参照）にも取り

組んでいます。挨拶は、周りから「挨拶しなさい」と言われるからやっているのでは何の意味もない。その意味を伝えて、自分から挨拶できるように教育しています。

大淵 補足すると、ファイターズのシステムとして、高卒は5年間、大卒と社会人出身者は2年間を「育成対象選手」と定めて教育をしています。この期間は、日誌や目標設定用紙などを期日に出すことが義務付けられています。また、免許は取ってもいいですが、車の運転は禁止。野球に集中しましょう、ということですね。なるほど、あらかじめ育成期間を設定しているんですね。

大淵 本村さんが来てから変わったと感ずるのは、「勇翔寮」（*鎌ヶ谷にある選手寮）全体がきれいになったことです。選手の部屋はもちろんですけど、施設全体がきれいになっています。

本村 恥ずかしい話ですけど、私が来た当初、事務所は段ボールだらけでした。でも、事務所は入ってすぐのところにあるわけですから、寮の看板。お客さんはまず事務所を見ます。玄関のスリッパも脱ぎっぱなしになっていたので、しっかりと下駄箱にしましましょうと。社会人として当たり前のことです。掃除したり、物を

ファイターズが求める選手像

1 Athlete (野球での成功)

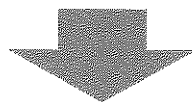
- 競技者として最高のパフォーマンスを発揮し、そのための努力と自己管理を怠らない選手。
- プロとして生活の全てを野球に優先できるメンタリティの持ち主。
- 多くの知識と経験を有し、他者への影響を与えることができる人間。

2 Fan Service 1st (ファンへの感謝)

- ファンと選手は相互に支えあう、欠かせない関係であると理解できる人間。
- ファンに対し素直に感謝を表現できる選手。
- ファンと同じ目線に立てる人物。

3 Role Model (社会への貢献)

- 自分が「プロ野球選手」である前に「社会人」であることが理解できる人間。
- モラルとルールを遵守できる社会人。
- 社会の模範として積極的に貢献できる人物。



野球を通じて社会に貢献する、
強い存在感を持つ人間

揃えたりすることは、心のすざみ除去につながります。また、揃えることによって、周囲に対して「きれいにしました」ということが伝わります。自分がやったことが、周りにもプラスの影響を与え、気持ちのよさは連鎖していくものです。こういった話を、新人が入寮した翌日に1時間近くかけて話すようにしています。選手に抵抗感みたいものはなかったのでしょうか。心のどこかに「野球をやりたのに」という気持ちはないのでしょうか。

大淵 それは、スカウトの仕事にもなってきました。ドラフトで指名したあとに、ファイターズが取り組んでいる教育の話を選手にあらかじめ伝えておきます。選手にとつては、最初に出会ったのがスカウトなので、球団にスカウトなわけです。そのスカウトが教育の話をするので、本村さんの話も入りやすくなるのかなと。スカウトが球団の入り口で、入団後は本村さんがより具体的に教育していくという形です。

——本村さんは実際にプロ野球選手と接してみて、高校生との違いをどのように感じましたか。

本村 さすがだなと思いました。理解力が高い。私が考えている教育の話を伝えると、どんどん入っていきます。言わば、「心のコップ」が上に向いている状態。食いつき方が違いました。高校生とプロ野球選手を見て感じるのは、プロのほうがゴールを決めやすいということです。高校野球というのは、じつはゴールを決めづらいんです。

——「甲子園」という言葉をよく聞きますが。

本村 それはチームの目標ですよ。個人で考えていくと、甲子園を考えている選手もいれば、大学で野球をやりたいとか、就職を目指しているとか、いろいろな思いがあるものです。それがプロ野球選手になると、「野球での成功」が第一となる。そこがはつきりしているのです。

大淵 なるほど、それはたしかに言えるかもしれません。

「読み・書き」に取り組む大きな意味

大淵 「インプットしたものを自分のなかでクリエイトする」

本村 「できた・できなかったの評価を○×で入れていく」

——大淵さんの教育にも、本村さんの教育にも、「野球日誌」というキーワードが出てきました。若手限定ではありませんが、球団全体で日誌に取り組むことは非常に珍しいと思います。どのような狙いがあるのでしょうか。

大淵 書くことはとても大事ですね。アウトプットしてこそ、意味がある。日々の練習や生活のなかで技術や考え方をインプットするだけでは単なるコピー。選手に伝えているのは、インプットしたものを自分のなかでクリエイトして、自分なりの形にしてアウトプットする。書くことでも、話すことでもいい。指導者である大人も同じですが、個として自立していくにはクリエイトする力が重要だと思います。

本村 それに、書き続ければ財産になりますよね。選手生活が終わったあとにも、読み返すことができ、社会に出たときに必ず役に立つはず。印象的なことは頭の

なかにも残りますが、書いたほうが確実に残りますよね。一流の人ほど、字として残しているように思います。だから、大谷（翔平）には後世に伝える意味でも、どんな形でもいいから言葉を残してくれと伝えていきます。

—— パソコンより手で書いたほうがいいですか？

本村 手のほうがいいですね。

大淵 そのときの気持ちの揺れが出る。

本村 字に出ますね。

大淵 それも含めて記録になるということですね。

—— 近年、高校野球でも日誌を書く学校が増えていきます。強制的に書かされている選手もいるように感じますが、そういう経験も大事ですか。

本村 いいと思いますね。高校生の場合は、強制的でもいいので書いたほうがいい。書いていくうちに、自分自身で気づくことが出てきますから。その経験があれば、たとえ高校野球で結果が出なかったとしても、人生での成功につながっていくはずです。あとは、中身の質をどこまで高めるかという問題はありますけど。高校生にもプロ野球選手にも言っているのは、「日記ではダメだよ、日誌にしてよ」と

いうことです。

—— ファイターズには決められたフォーマットがあるのでしょうか？

本村 選手専用のフォーマットが決められています。心・技・体・生活におけるのよかつた点と課題を書いて、次の日に向けての具体的な行動目標を5つ書きます。それに対して、翌日にできた・できなかったの評価を○と×で入れていく。その5つは、野球のこともいいし、生活のことも構いません。

大淵 1日1日に区切りをつけていくわけですね。

本村 はい、毎日毎日の繰り返しです。×が付いていれば、自分自身の弱いところだと気づく。この気づきが大切です。

—— 最初、書けない選手はいませんか。

本村 正直、差はあります。高校時代から書いている選手はすぐに書けるし、まったくやってこなかった選手は書けない。でも、これは訓練です。野球日誌に対する意識が上がれば書けるし、「必要ない」と思えば書けない。書ける能力というよりは、いかに大事なものと気づくかですね。面白いもので、字が書けない選手というのは、本をあまり読まない選手です。読書が好きな選手は書けます。なので、ファ

月 日() 今日の目標		確認	(気づき・感想・反省)
(今日必ずやる目標/具体的な行動目標)			
1:00	生活 睡眠状態 良好・不良	心 良かった点	
2			
3			
4	体重 kg	課題	
5			
6			
7	朝食内容		
8			
9			
10	生活態度		
11			
12			
13	昼食内容	技 良かった点	
14			
15			
16	体の状態 良好・不良	課題	
17			
18			
19	練習内容		
20			
21			
22	夕食内容	体 良かった点	
23			
0			
24	夜間練習(必ず記入)	課題	
25			
26			
27	補助食品		
28			
29			
30	運動 回(良・硬・軟)		
31			
0			
今日の評価 S・4・3・2・1 (明日への決意表明/プラスの言葉)			

野球日誌のフォーマット。選手を「教育」する取り組みが見て取れる。

大淵 イターズでは読書を取り入れているんです。寮生は毎朝1日10分、読書の時間があります。本を読む習慣をつけてほしいので、同じ場所に集まって読んでいます。時間も決まっているんですか？

本村 朝の体操、食事、読書まではみんな一緒に行動しますね。

本村 自分の部屋で、ひとりで読みたいという選手はいませんか？
 います。新人には本を読む習慣をつけてほしいので、はじめの1ヶ月は同じ場所に集まって読む。そこからは、部屋で読んでもいいとしています。遠征のときは本を持っていて、遠征先で読む習慣をつけています。

球団として推薦図書を紹介することもありますか？

本村 そういうやり方もあるとは思いますが、それではこちらの気持ちを押し付けてしまうことになりかねない。人によって、そのときに求めている本は違うものです。小説でもいいし、野球の本でもいいし、自己啓発の本でもいい。

大淵 わかりますね。本屋に行くと、キラッと光っている本がある。そのときの気持ちによって違いますよね。私も、読書は絶対に大事だと思えます。教員をやっているのだからわかりますが、国語の成績が悪い生徒はほかの教科もよくはない。問題文

を理解できていないわけですよ。読む、書く、伝える。これは絶対ですね。契約書を読んだり、書類を書いたり、活字とは一生付き合っていくわけです。ユニフォームを脱いだあとにも、必ず役立ちます。イヤなのは、プロ野球の世界では世間の非常識が常識になってしまうことです。これでは社会に出たときに困ってしまう。新人は、昨日が休みでした。だから、「本屋に行つて、読みたい本を探してくるよ」に」と課題を与えました。小説を買ってきた選手もいて、セレクトがなかなか面白かったですよ。ただ、だいたいは野球の本からスタートしています。

大淵 そのほうが入りやすいですからね。
——読書感想文のようなレポートもあるのですか？

本村 それはありません。ただ、半年に1回、大きな面談があります。野球の面では遠藤良平GM補佐が、教育面は私が担当し、半期の振り返りを行っています。そのときにどんな本を読んできたのかを必ず聞くので、読んでいない選手は答えられないことになります。

「目標」の正しい定め方

大淵 「『いつまで』という期日が大切」
本村 「目標設定には具体的な数字が重要」

——「書く」という意味では、目標設定用紙も教育面の大きな柱になりますか。

本村 はい、長期目標設定用紙に取り組んでいます。シーズンの目標を立てると同時に、そこにたどりつくまでの短期目標を決めていく。「いつまでに達成するか」という期日も設定しています。

大淵 「いつまで」がないと、取り組みがあやふやになりますね。

——目標の立て方で、選手の意識の高さは見えてきますか。

本村 見えてきますね。たとえば、大谷は花巻東（岩手）のときから目標の決め方を学んでいた選手ですが、入団当初から必ず数字を書いていました。1年目の目標は「5勝」。目標というのは、野球を知らない人でもわかるようなことでなければいけないわけです。そのためには、具体的な数字が必要になります。たとえば、「いピッチャーになる!」と書いても、その基準があいまいなので、目標を達成で

きたのかどうか評価がしづらいですよね。

なるほど、たしかにそうですね。

大淵 目標を設定するところから、感覚の違いがあると。

本村 全然、違いますね。大谷はプレーヤーとして一流ですが、考え方も一流です。自分でやると決めたことを、必ず実行できる。どんなに忙しかつたとしても、やることをしっかりとやる。タイムマネジメントのうまさを感じます。周りが何をしていたとしても、流されることはありません。表現を変えれば、「自己管理能力」がものすごく高いですね。ですから、二刀流であれだけの結果が出るのは当然だと思います。

大淵 圧倒的な向上心を持っていますね。本村さんが言うように考え方も一流。プロで長く活躍するためには、考え方のスキルも非常に重要だと感じます。大谷は、自分で目標設定用紙を取りに来るそうですね。

本村 はい、自分で来ますね。普通は、学校みたいにくちから配って、「何日まで提出」と伝えるのですが、大谷は自分から取りに来ますね。それだけ、効果を実感しているということですね。

—— 目標を書き直させることもあるのですか？

本村 否定はしませんが、「期日目標」に対してどうかという話します。定期的に行う面談のなかで、決めた目標に対して○か×の評価をさせていただきます。

—— 野球日誌のルーティンと同じですね。○と×で評価をする。

本村 そのときに、「これでは目標に届かないのでは？」と話して、目標に修正をかけることもあります。大事なことは、書きっぱなしにしないこと。よくあるのが年間目標を書いて、机のなかに入れておけばなしにしていたとか……。決めた目標に対して自分は今どこにいるのかを確認する習慣をつけさせています。

大淵 書いた目標を寮で貼り出しているんですね。

本村 はい、やっています。ほかの選手にも見えるように貼っておく。それだけで意識が変わってきます。

—— 大谷選手が取り組んでいることで話題になったマンダラートについても、教えてください。

本村 育成対象の選手は年に1回、オフに入る前に書くことが義務付けられています。

大淵 一番の狙いはどこにあるんですか。

体のケア	サプリメントをのむ	FSQ 90kg	インステップ改善	体幹強化	軸をぶらさない	角度をつける	上からボールをたたく	リストの強化
柔軟性	体づくり	RSQ 130kg	リリースポイントの安定	コントロール	不安をなくす	力まない	キレ	下半身主導
スタミナ	可動域	食事 夜7杯 朝3杯	下肢の強化	体を動かさない	メンタルコントロールをする	ボールを前でリリース	回転数アップ	可動域
はっきりした目標、目的をもつ	一喜一憂しない	頭は冷静に心は熱く	体づくり	コントロール	キレ	軸でまわる	下肢の強化	体重増加
ピンチに強い	メンタル	雰囲気 に流されない	メンタル	ドラ1 8球回	スピード 160km/h	体幹強化	スピード 160km/h	肩周りの強化
波をつくらない	勝利への執念	仲間を思いやる心	人間性	運	変化球	可動域	ライナー キャッチ ボール	ピッチングを増やす
感性	愛される人間	計画性	あいさつ	ゴミ拾い	部屋そうじ	カウント ボールを増やす	フォーク 完成	スライダ ーのキレ
思いやり	人間性	感謝	道具を大切に使う	運	審判さんへの態度	遅く落差のあるカーブ	変化球	左打者への決め球
礼儀	信頼される人間	継続力	プラス思考	応援される人間になる	本を読む	ストレートと同じフォームで投げる	ストライクからボールに投げるコントロール	奥行きをイメージ

(出所) スポーツニッポン

大谷選手が花巻東高時代に書いたマンガラート。マスを埋めていくことで何が必要か見えてくる。

本村 頭のなかの整理です。目標に対して、具体的に何が必要なのかを整理できる。何も考えないで練習をする選手は結構いるので、「何のためにやるのか」を明確にすることが大切です。「10本走れ」と言われたから10本走ると、目的をわかつたうえで走るのでは違いますよね。

高校生も一生懸命努力していますが、「何のために」が抜けている選手が多いと感じます。

本村 ファイターズでは、「何のために」を重視しています。たとえば「3割打つ」と決めたとして、何のためにその目標を立てたのか。「チームの勝利に貢献するために」でもいいですし、自分で考えさせていきます。

マサ目が多いですが、すぐに書けるものでしょうか。

本村 なかなか、難しいですね。新人は今ちょうど(1月下旬)取り組んでいるところですが。このシートのいいところは、ほかの選手の言葉を拾えるところなんです。

大淵 それは知らなかった。ほかの選手のシートを見ていいんですか。

本村 はい、あえてそうしています。名前は伏せていますけどね。新人はすぐには書けませんから、先輩のシートを見て、「こういう考えもあるのか」と自分に取り入れ

ていくわけです。誰の言葉を引っ張ってくるかというセンスも問われます。まあ、大谷のシートはすぐにわかりますけどね（笑）。

——高校生でも取り組めることですか。

本村 考えることによつて、自分に何が足りないかもわかってきますから。どんどんやってほしいですね。

「いまだき」世代への指導法

大淵 「自分自身で道を切り開いていく時代」

本村 「恵まれていることに自ら気づけるか」

——時代の移り変わりとともに子どもたちの気質が変わってきていると言われています。「いまだき世代への指導」が本書のテーマでもあるわけですが、「いまだき世代」から感じることはありますか。

本村 どうでしょうね。人としての本質的なものは変わっていないと思います。「最近の子は」というのは、いつの時代も言われていることですし。あまりそういう目で

見たくはない、という気持ちもありますね。ただ、環境が変わっているのは事実。簡単に言えば、環境の変化によつて、ハングリーな子どもたちが減ってきている。プロ野球を取り巻く環境も、昔と比べるとよくなっていると感じます。

大淵 恵まれた環境にいますね。

本村 恵まれていることや、環境を与えられていることに、いかに気づけるかです。そこに気づくことができないと、ワンランク上にはいけないように感じます。昔はそんなことを言わなくても、ハングリーな時代でしたから、自然に身につけていたと思うんです。今は生活のなかでは身につかないので、自分で身につけなければいけない。そのあたりの難しさは感じます。

——身につけるためにどんな取り組みをしていますか。

本村 それは、常日頃から言い続けるしかないと思っています。道具ひとつにしても、メーカーの方から与えられている選手が多い。その道具がなければ野球ができないということが、どこまでわかっているか。最終的には「義理人情がないと大成していかないよ」とも伝えていきます。

——大淵さんはいまどき世代から感じることはありますか。

大淵 いまどき世代云々よりも、「これからの社会を生きていくために」という視点で感じることはあります。社会も経済も右肩上がりに伸びている時代は、指示に対して従順に動ける人間や、何ごともソツなくこなせる平均点が高い人間が求められていたと思います。ただ、バブル以降は社会全体が完全に底をついてしまいました。指示の通り動いているだけでは、なかなか生きていけない。個人が自分自身で道を切り拓いていかなければいけない時代だと思っています。状況を見て、自分で考え、創意工夫をして、自分で決断する。先ほども言いましたが、コピーではなく、クリエイトできる人間になってほしい。本村さんの指導に魅かれたのは、こういう側面もありました。個を生かして、その個をまとめるのが上に立つ人の役割だと思っています。

——スカウトの立場から、練習や試合で選手の人間的な部分は見えてくるものですか。

大淵 見えますよ。それに、そこを見なければいけないと思っています。わかりやすい例を出せば、ベンチにいる監督のことをしょっちゅう見ている選手はどうか……: と思います。ただ、矛盾するかもしれませんが、全員がクリエイトできるタイプ

でなくてもいいんです。組織に従順で、言われたことをきっちりできるタイプも必要になります。

——昨今は体罰の問題もあり、「厳しい指導ができない」と悩んでいる指導者がいます。この「厳しい」というのは人によってとらえ方が違うと思いますが、お二人はどのようにとらえていますか。

大淵 うーん、厳しくないといけないのかな……。指導者が選手に対して厳しくしなければいけないという前提が、どうなのかなと思います。規律を守る意味での厳しさなのか、パフォーマンスを上げるための厳しさなのかで、考えは変わってくるでしょうが。結局、自分を高めていくのは誰かと言えば、指導者ではなく、最後は自分自身です。つまりは、自分自身に対していかに厳しくできるか。そういう選手になってほしいですね。

本村 私も同じ考えです。選手が自分で考えて、自分でやり遂げることのほうが大変です。自分自身をしつかりと見つめる。この環境を作るのが、指導者の仕事だと思っています。これができれば、野球が終わって、社会に出たあとでも必ず成長できるはずですよ。

大測 指導者の仕事は、マネジメントだと考えています。知っていることを伝えること、教えることも大事ですが、目の前にいる子どもたちを生かすためにはどうしたらいいか。そういった環境を作ることこそ、指導者の仕事だと思うのです。

——いまどきという点では、ツイッターをはじめとしたSNSの普及によって、誰もが情報を発信できる時代になっています。それによる問題も起きたりしていますが、ファイターズでは何かルールは決めていますか。

本村 社の新入社員研修でも使う教育用ビデオを見せて、SNSの怖さを伝えていきます。

大測 正直、あまりにもリスクが大きいかと思います。そのリスクを伝えたいうえで、ファイターズの場合はやめている選手が多い。アマチュア時代は気軽に利用していたものが、プロ野球選手になった瞬間に「凶器」になることもあるわけです。痛い思いをすればわかることかもしれませんが、それと同時に失うこともありえますから。

——高校生のツイッターを見ると、ヒヤヒヤすることもあります。

大測 あまり明かすことではないと思いますが、スカウトの立場からドラフト対象選手
のSNSはチェックしています。自由につぶやいている選手もいれば、非公開にしている選手もいる。それによつて評価がどうというのはいませんが、感覚的に思うところはあります。

今の社会におけるプロ野球選手の役割

大測 「社会の学級委員長になってほしい」

本村 「メッセージを発信してほしい」

——お二人とも元教員という共通項があります。教員を経験したことは、今の仕事にどのように生きていますか。

大測 私は大学卒業後、IBMで7年働いたあとに、教員を5年しています。教員を経験したことで、許容範囲が広がったのが一番大きいですね。さまざまな家庭環境の子どもが通っていて、自分が考えている以上の幅がありました。スカウトとしてもその視点を持ちながら、選手を見ている。たとえば、「素行不良」と噂されている選手がいるとします。でも、だからと言って「じゃあ、ダメだ」ではなくて、

その裏には必ず何かしらの理由がある。家庭環境だったり、生い立ちだったり、その選手だけの責任ではないわけです。最初からヤンチャだったわけではなく、何かきっかけがあった。本当のところはどうなんだろうと。

——IBMからすぐにスカウトなっていたら……。

大測 「この性格じゃダメだな」と決めつけていたと思いますね。

——どちらかと言うと、日本ハムは「ヤンチャ」と言われている選手でも獲得しているイメージがあります。

大測 そうですかね。意識して獲っているわけではないですけど、ファイターズの今の体制であれば教育できると思うのは事実です。私たちが思っている許容範囲と、他球団の許容範囲が違うのかもしれない。そういう目で見ていかないと、他球団との差別化をはかることもできませんから。

——高卒が多いのはどうしてでしょうか。

大測 それは「スカウティングと育成で勝つ」という球団の方針です。そうになると、自然に若い選手に目が向くようになります。だからこそ、教育が必要になるのです。やっぱり、新人を見ていても、社会人から入ってきた選手はしつかりとしています。

すよ。

——本村さんはいかがですか、教員の目はどう生きていますか。

本村 私は17年間、高校の教員をやりました。生活環境含めて、さまざまな子と接するなかで、「こういうタイプの子はこんな教育をすると伸びていく」と見えるようになってきたのが大きいです。

——そのタイプはどれぐらいあるものですか。

本村 そうやって聞かれると……、型にはめられないんですけどね。日誌を見たり、普段付き合ったりしていくなかで、その子の考えていることが見えてくるものです。

大測 人が人を見るって、そういう感じですよ。よく、「どんな選手が伸びますか？」と聞かれるんですけど、「こういうタイプですよ」と口にしてしまうと、ほかのタイプを排除してしまうような気がして。じつは、何度かタイプ別にわけようとしたこともあるんですけど、やればやるほど嘘っぽくなるんです。見栄えはきれいでも、本質から外れてしまいます。



教員からプロ野球界に転身した両氏。教員時代の経験を存分に生かしている。

——プロの世界に入ってから、大淵さんは10年、本村さんは5年が経っています。社会におけるプロ野球選手の役割はどのように感じていますか。

大淵

選手に伝えているのは、「社会の学級委員長になりましょう」ということ。社会のリーダーであり、ロールモデルになつてほしい。スポーツのなかでもっとも注目を集めるプロ野球選手にこそ、そこを目指してほしいのです。「一軍で活躍したい」「お金を稼ぎたい」という目標は当然あつていいものですが、さらにもっと上の意識が必要だと感じています。スカウトを始める前からですが、「スポーツの価値とは何か」を考えています。わかりやすく言えば、スポーツをすることによって何を得られるのか。礼儀、忍耐力、考える力……いろいろとあるとは思いますが、顕在化しなくてはいけないと思つています。

——言葉にして明文化する。

大淵

そういうことです。「スポーツをやっているやつはバカだ」とか「脳みそが筋肉」とか、揶揄される表現がありますよね。テレビ番組によっては、社会のリーダーではなく、社会のいじられ役と感ぜるときもあります。もつと高尚というか、品位のある存在でいてほしい。「うまければいい」という価値観ではなく、パフォー

マンスと知性を兼ね備えたアスリートが生まれてほしいと思います。

本村

ファイターズが求める選手像は「野球を通じて社会に貢献する、強い存在感を持つ人間」です。パフォーマンス向上に取り組むことと同時に、「人間力」を高めていく。そのためには、学生るときから心を磨いてほしいと思います。

——大谷選手はそういう素養を持つているように感じます。

大淵

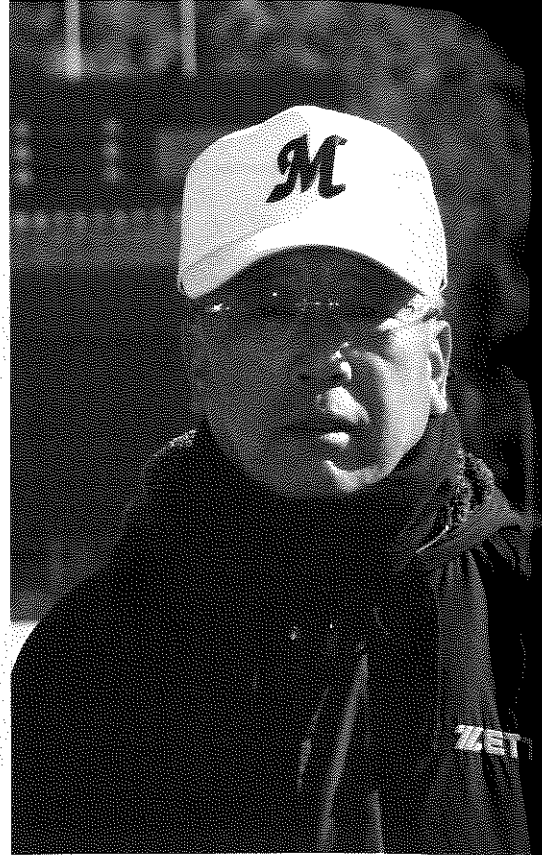
そうですね。知性を使うことによつて、パフォーマンスが上がるのがわかっている。最初にお話したように、プロ野球にはメッセージ力があります。たとえば、試合後のヒーローインタビューで、

特別
インタビュー

馬淵 史郎

明德義塾（高知）

監督



「高校野球は教育そのもの」 甲子園通算45勝の名将が いまどき世代を語る

まぶち しろう

1955年生まれ、愛媛県出身。三瓶高（愛媛）—拓殖大—阿部企業。1986年には阿部企業の監督として日本選手権準優勝。87年から明德義塾のコーチとなり、90年の新チームから監督に就任。翌91年夏には監督として初の甲子園出場を果たす。98年夏は寺本四郎（元千葉ロッテ）らを擁して、甲子園ベスト4。松坂大輔（ソフトバンク）がいた横浜（神奈川）と死闘を演じた。2002年には悲願の甲子園優勝を成し遂げた。

「明日も応援よろしくお願いします！」だけではなくて、社会に対するメッセージを発信することもできる。いじめ問題がニュースになっていったとしたら、「いじめはやめよう！」と子どもたちに伝えることもできるわけです。実際に「きみたちには、そういう資格があるんだよ」と話しています。それがわかっていけば、身だしなみも含めて、日頃からのように振る舞えばいいのかもわかってくると思うのです。

本村 私も、大淵さんと同じ考えです。大きな影響力を持っているプロ野球選手だからこそ、メッセージを発信していったほうがいいですね。

——ファイターズから多くの一流アスリートが育つことを、楽しみにしています。今日はお忙しいなか、ありがとうございます。